

---

# 星の軌跡

梅花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星の軌跡

### 【Nコード】

N7233D

### 【作者名】

梅花

### 【あらすじ】

「亡くなったら、空のお星様になるのよ」まさか、それは本当のことだったとは。婚約者に殺されたロザリーは、星渡しのジャスティンと出会う。身体をなくした魂は星になって完全に『死ぬ』、つまり星のない魂は永遠にさまようことになる。そしてジャスティンはその星を与える役目なのだという。しかしロザリーの星は……。

## 序章 終わりの始まり

まぶしい程白く、美しかったドレスはじわじわと赤に染まり、ぱたぱたと赤い粒を滴らした。

体重を支えきれなくなった細い足はがくりと折れ、彼女は力なく仰向けに地面に倒れた。その衣服には泥のしみがつき、光沢のある優雅な銀色の長い髪も赤に浸食されていった。真っ暗な辺りには荒い呼吸音とぶちぶちつと何かを引きちぎる音が響く。

そして最後に、彼が彼女の細くやわらかい手を手に取ると、目を細めて、

「婚約は、解消だ」

そう呟いて、するりと指輪を薬指から引き抜いた。その細密なデザインが施された金の指輪は一目で高価だとわかる。彼はその指輪を布でくるむと、丁寧にコートのポケットにしまった。

すると倒れている彼女がかすかな声でつぶやく。真夜中の森の静けさだからこそ聞こえるような、小さな声で。

「……………し……………て」

すでに真っ赤な口元からは絶えず血が流れ続け、必死に呼吸をしようとするその息遣いは荒い。

彼は特別動揺した様子もなく、死体を見る様な冷たい目で一言、  
「さようなら」

とだけ言つと立ち上がり、振り返る事もなく、小枝を踏む足音を響かせながら去って行った。

その黒い後ろ姿を彼女は、身動きの出来ない身体でただひたすらに目で追い続ける。しかし、見える世界もだんだん揺らめき始め、その円な目からはつうつと一筋の涙が流れた。涙で滲んだ視界と朦朧とする意識の中で彼女は絶望してつぶやく。

（私、死ぬんだ……………）



## 第一章 紹介

目を覚ましたら、死んでいた。

ということは、小説の中ではよくある展開だけど。

「っ！」

ロザリーは強烈な胸の痛みで目を覚ました。

(く……あ……あ……っ！)

あまりの痛みに声にならない悲鳴をあげた。

胸は切り裂かれたように痛み、頭がズキンと痛んだ。

「ロザリー！ しっかりして、ロザリー！」

これはたぶん、お母さんの声。その悲痛の声はなんとか聞こえるけど、あまりの痛みに気が狂ってしまいそうになる。視界が白と黒と絶えず変わっていく。身体全体が燃えるように熱くて、もがきたいけど身体に力が入らず、ただただ意識の中で苦しくもがき続けた。

「お姉ちゃん！」

「ロザリー！」

妹の悲鳴のような声が聞こえて、お母さんの泣きじゃくる声も聞こえた。薄く目を開けると二人の悲痛の顔が見えた。

かすかに見える視界でそんな家族を見て、ひどく心が痛んだ。でも大丈夫といえる状態でもなく、とにかく頭の中は『痛い』という苦痛の感覚でいっぱいだった。

「なんとかできないの!？」

「いいえ、今となってはもう手遅れです。ここまで持ち続けたのが奇跡なのです」

「そんな……。何か方法があるでしょう！」

いつもは落ち着いているお母さんがヒステリックに叫んだ。

「私の大切な娘なのよ！ 結婚前の、娘なのよ！」

痛い痛い痛い。しかし迫りくる激痛は引く様子を見せない。

「何でもするわ！」

堪えきれない。パニックに呼吸が不規則になって、息も上手くできなくなつた。

もう正気ではいられない。

「お願い、生きて！」

もういつそ、殺して！

そして次の瞬間、すべてが楽になつた。

すべての痛みはなくなつて、息も楽になつて、身体の制御もできる。視界も白黒することもなく、すつと吸う息は安定していて、あまりの幸せな気持ちに何もかも忘れて眠りたくなつた。

どうせ疲れていたのだから、このまま寝てしまつてもいいよね…

…。

もうこの幸福さえあれば何もいらぬ。ただ眠らせて……。

しかし、軽く眠りに入れたと思うと、穏やかな声が頭に響いて口ザリーを起こした。

「起きて」

……何で？ やつと落ち着けたのに。

どうせまだ朝じゃないでしょ……。

「起きて、ロザリー」

起きたくない……。お願いだから、もうちょっとこのまま。

「ロザリー」

嫌々ながら薄く目を空けると、見慣れない顔がのぞいていた。

マロン色の柔らかい茶髪は無造作に整えてあつて、その肌は乳白色で明るく柔らかさうだった。男の顔にしては少し幼く見えて、そばかすが一層少年っぽさを表している。その表情はすこし不安そうに頼りなさそうといえはそうとも見えるけど、何よりも奇妙だったのが彼の目。ガラスのような青でもなく、木漏れ日のような緑でもなく、大地のような茶でも黒羽のような黒でもなかった。透明で、

色がなかったのだ。

起きた瞬間でここまで観察できる程ロザリーは洞察力が鋭くない。絶対これだけのことを考えるのに最低は三分かかったと思う。ロザリーはぼんやりとした意識のまま彼をみつめ続けた。

「うーん。ほら、とりあえず起きて」

ただじつと見つめ続けるロザリーに不安になったのか、彼は手を差し伸べた。ほとんど無意識にその手をとって、起き上がるうとする。

でも思ったより軽く起き上がった。まるで背中に支えるバネがあるかのように、重力がないみたいに……。

「つて、え？」

起き上がったらそのまま上にふわりと浮いて、彼と並んだ。隣を驚いた目で見つめると、彼ははにかんだように笑った。

「浮いてる！」

思わず彼を指差して叫ぶと、

「自分もね」

と言われ、下を見る。

いきなりの光景に驚いてロザリーは、はっと息を呑んでそれを凝視した。

ベッドの上に身動きもせず寝ているのは、端正な顔の女の子。その顔には泥と血が拭い取られたような痕が残っている。目は両方とも静かに閉じられていて、無表情だからまるで人形みたいだ。その長い、ウェーブのかかった真珠色の髪はもっとと血と泥で汚れていて、白いベッドのシーツもところどころ血に染まっていた。

このグロテスクな光景の、人物は。

「……私？」

ふるえる唇でつぶやいたその声は、ひどくかすれて聞こえた。

「うん」

彼は申し訳なさそうに言った。

「寝ているの？」

「……………」

「死んでいるんだ？」

「……うん」

すると、部屋のドアが静かに開いて、見慣れた人物が入ってきた。召使いのロランだ。

そこで初めてここが自分の寝室だと気がついた。

見慣れた、割と高価な家具と記憶と同じのアイボリーの壁紙、いつも寝起きた柔らかかなベッド。それなのにそこに当然と寝ている自分を見るのはひどく異様に感じた。

ロランはそつと足音もたてずにロザリーの身体に近寄り、そつとその頬に触れると目を少し涙になじませた。ロランはロザリーの兄貴分のような存在で、そんな姿を見るのはある意味衝撃的だった。

「ロラン……」

目頭が熱くなるのを感じて、おもわずロランの肩に触れようとすると、

「あ、やめろっ」

しかし彼の忠告もむなしく、ロザリーの手はロランの肩にそつと触れ、そしてそのまま二の腕あたりまで透き通ってしまった。

「！」

驚いて、腕を引っ込める。涙も引っ込んだ。

彼はそのままロザリーの腕をつかんで、彼の正面へと振り向かせた。

「ロザリー。君はさつき死んだんだ。今は魂だけだから、地球上のものには触れないんだよ」

言葉はただ耳を通り抜けたようだ。

理解ができない。ロザリーは首をかしげた。

「何を言ってるの……？」

そして、ロランに次いでまた一人、一人と見慣れた召使いたちが入ってきた。全員がなんとなくロザリーの身体を囲むように並んだと思うと、ひそひそ噂話を始めた。中にはその姿を見て泣き出す者

もいた。

「お嬢さんの姿を見ると心が痛むな」

「駆け落ちをしようと家を出たら、そのまま殺されてしまうなんて」「やっぱり奥様が決めた許嫁がよほど嫌で」

「そもそもご主人様が蒸発したのが」

「ねえ、宝石が全部とられてるみたい」

「それはひどいな」

「これはあつという間に街に噂が広まるぞ」

「どうもみ消すつもりなんだ？」

「というかなんでもみ消すの？」

「警察沙汰にはしたくないとか。繊細な方なのよ、奥様は」

「確かにこれ以上の心労は危ないしな」

「とりあえず、お嬢さんの死体を」

『死体』という言葉にロザリーの身体は、電流が走ったみたいに反応した。顔にかあつと血が上る。……血があればの話だけど。

「どこに持って行くんだっけ？」

ロランが目をこしつとこすつて立ち上がると、皆が一斉にロザリーの身体をシーツごと持ち上げた。そしてドアへと歩き出す。

「ち、ちよつと！」

「無駄だつてば」

そう言つて彼は、ついでに行こうとするロザリーの腕をぎゅっと掴んだまま離さなかった。

「で、でも、私の身体がっ」

「死んでからは必要ないよ」

ずつと解けずにいた問題に、答えを突きつけられた感じだった。

そっか……。

自分の身体が運ばれて行くところを見送っていると、だんだん落ち着いてきた。

そっか、死んだんだ。

この状況を説明する、筋の通った回答だった。

なんか、あんまり身近には感じられないけど。でも、浮いていた  
り人を通り抜けたり。これが死んだということ？

「落ち着いた？」

呆然とするロザリーの目の前で彼が手をひらひらさせた。

はっとして彼を見ると、苦笑していた。

「いいんだ。死んだ後って結構混乱するもんだし。ほら、ま、基本的  
に死後の世界って生きている人には、誰にもわからないもんだし、  
未知の世界というか……。特に苦痛で死んだ人はなかなか身体から離  
れないですつと休もうとしたり、若く死んだ人は未練とかでひたす  
ら魂のまま逃げようとするし……。ってあれ、僕何言ってるんだろう」  
てへへ、と彼ははにかむように笑った。

たぶん、安心させるために気を使ってくれてるんだと思う。

ロザリーがよっほど混乱した表情をしていたんだろう。

「あなたは誰？」

とりあえず自分のベッドにふわっと腰掛けて、真っ先に思いつい  
た質問をした。

……ちよつと不躰だったかな。

でも彼は控えめに、にこつと笑った。彼はいつも謙虚な笑い方を  
する。

「僕はジャステイン。 星渡し をしてるよ」

「 星渡し ？」

首を傾げた。聞いた事の無い言葉だ。

「そう。簡単に説明すると」

ジャステインはふわっと隣に座った。

「身体が死んだ魂は」

ジャステインは優しくロザリーの手をとって、上を指差した。

「 星 が与えられて、天へ行くんだよ。そして、夜空に輝く  
星となるんだ。それがロザリー達人間の言う『成仏』。魂が完全に  
休まること。それで 星渡し の仕事は身体をなくした魂に星を与  
えることなんだ」

「あれ、そしたら、亡くなったら空のお星様になるっていうのは本当だったんだ」

思わず率直な反応をするとジャスティンは、ははつと笑った。

「そうだよ。昔 星渡し をしていた人が、死んだと思っただ人にバラしたんだけど実はまだ生きていた人だったって話。有名な話だよ」  
あらためて自分が生きていた世界がどれだけ小さかったのかを思い知らされた。

本当に死後の世界ってあったんだ……。あながち、子どもの本とかファンタジーも間違っていない。

ジャスティンは続ける。

「そして、いわゆる『幽霊』はまだ星の与えられていないさまよっている魂か……。星 がない魂。僕は後者ね」  
「え？」

驚いて聞き返すと、ジャスティンはバツの悪そうに笑った。たぶんしまった、口を滑らしたとも思っているんだろう。

「えっと、まあ、星 ってのは結構貴重なもので。一人につき一つって厳しく決まっているんだ。僕の場合は……。まあ、うん、とにかく 星 がなくて……。星になる代わりに 星渡し になっただよ」

途中言いたくないのか、言葉を濁したけど別に気にならなかった。

……。深入りして聞く事でもないし。

「じゃあ、誰かがこういうのを全体的に管理しているのよね？ 神様とか？」

「あ、えーと、そういう明らかかな一人のリーダーはいなくて、年配の人たち……長い事魂でいる人達がまとまって、管理しているんだ」

ロザリーはへえ、と感嘆の声を出した。

「そういう世界が本当にあっただ」

「天へ行く途中で僕みたいなのにいる会うと思うよ。ロザリーと同じ時に星になる人もいっぱいいると思うし。とにかく僕はこの星 を渡して」



「……………どうしよう」

「ど、どうしたの」

心配してジャスティンの顔をのぞくと、透明な目が申し訳なさそうにこっちを見つめた。

「ロザリーの星がない」

……………えええ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7233d/>

---

星の軌跡

2011年1月4日03時54分発行